

日本語文法(史的研究)

小田 勝

前号(97号)以後の2013-2015年の研究動向について述べる。今期、富岡宏太氏の中古語の終助詞に関する一連の論考に注目させられた。「中古和文における体言下接の終助詞カナ・ヤ」(『日本語の研究』10-4, 2014.10)は、「体言かな」が聞き手・時制の制約なく用いられるのに対し、「体言や」は現場即応的であると述べる。「詠嘆」と対話・独話(『国語研究』78, 2015.2)は「かな」が対話・独話の双方で用いられることを示す。そのような終助詞は現代語では珍しい。氏にはほかに「よ」についての論などもあり(『国語研究』77, 2014.2、『國學院雑誌』115-5, 2014.6)、今後の発展を期待したい。古田島洋介『日本近代史を学ぶための文語文入門』(吉川弘文館2013.9)は入門書の体裁をとってはいるが、漢文訓読体の文語文の解釈上の盲点を突いた非常に重要な指摘に満ちている。管到の問題、「是ヲ以テ」が「以是」「是以」のどちらかわからないなどの原漢文不在に起因する問題や、仮定表現の「…ヲシテ…セシメバ」に使役の意はない(漢文の「使NV」が使役・仮定の両方に用いられるため)など解釈上の留意点を説く。漢文訓読体の文語文の詳細な記述・解釈文法書の整備が必要であると痛感した。

古典の本文関係では、加藤昌嘉『源氏物語』前後左右(勉誠出版2014.6)、中川照将『「源氏物語」という幻想』(勉誠出版2014.10)、『新時代への源氏学7 複数化する源氏物語』(竹林舎2015.5)など。古

典文法の研究者も、古典文学作品の本文とはいかなるものであるかについて大いに考えさせられる。

ところで、私には古典文が読めないという泣き出したくなるような飢餓感があるが、この感覚は共有されているのだろうか。『リポート笠間59』(2015.11)は古典の現代語訳についての特集号だが、その点で楽天的にみえた。「読めない」という意味は古典文について文法的に複数の解釈が成立して一つに確定できないということである。拙著『実例詳解古典文法総覧』(和泉書院2015.4)では源氏物語の1文を5通りに解釈してみせた(714頁)。源氏物語冒頭部の「あいなく目をそばめつつ」にしても、状態修飾、内容補充、評価誘導、程度修飾等何通りにも解釈可能である。前記の書名「複数化する源氏物語」とは本文についての謂であるが、一本を読み進めていく中でも複数解を保留したまま読んでいくしかない、ということはどう考えればよいのだろうか。古典文について現在大規模なコーパスの構築が進行中で、やがて構文情報も付されるといふ。では「サテ行ク程ニ、亦狐^あ値ヒヌ」(今昔物語集5-20)は何格か。伊勢物語の「修行者^ぢ会ひたり」同様、普通は主格と考えるだろうが、後文には「…行クニ犬^い値ヒヌ。」と出る。格一つ決められない。解釈文法研究が不振になって久しいが、我々には古典文がよく読めないのだということを肝に銘じていたい。副題を割愛しての題目引用、ご寛恕を乞う。

(國學院大學)

日本文学研究(古典)

西田 隆政

古典文学全般の展望となると、稿者の力不足と紙幅の関係で不可能である。そこで、稿者も所属する中古文学会のあり方から、現在の古典文学研究の状況について展望していくことにしたい。

従来、中古文学会では、5月と10月の週末土曜日と日曜日に大会を開催し、10あまりの研究発表が行われるのが常であった。それが、2014年度からは、大会の運営方法が大きく変更され、定例的にシンポジウムが開催されるようになった。

この背景には、古典文学研究を取り巻く厳しい状況がある。従来の古典作品を丁寧に読解する、そこから芸論を展開するといった、古典を研究すること自体が自明の価値のある行為であるという社会的な評価が失われてきたことによる。

具体的な事例を見ると、2014年度春季大会ではミニシンポジウム①「定家本・青表紙本『源氏物語』とは、そもそも何か」とミニシンポジウム②「中古文学会で、中世王朝物語を考える」、2014年度秋季大会ではシンポジウム「源氏物語 典拠と準拠の再検討」、2015年度春季大会ではミニシンポジウム①「平安時代はなぜ女性書き手の文学を輩出したのか」とミニシンポジウム②「注釈のジェンダーバイアスを問う」、2015年度秋季大会では大会企画シンポジウム「室町戦国期の『源氏物語』一本の流通・注の伝播」となっている。

一見して理解されるように、平安時代

という枠を超え、さらには、文学の享受された社会を見据えた学際的なテーマへの展開も試みられている。ただ、それらが、機関誌『中古文学』への原稿として掲載されたものを見ると、積極的な問題提起という方向性は見られるものの、どのように発展させていくのか、という点からすると、まだ具体的な研究方法や成果が提示される段階ではないことが看取される。

また、シンポジウムで取り上げられたテーマ自体も、中古文学会で統一テーマとして取り上げられた意義は大きいものの、これらのテーマは、いずれも隣接研究分野や関連する研究分野では、すでに当たり前のように行われていることであり、特に目新しいというものでもない。

確かに、これまでの中古文学会のあり方からするならば、画期的な試みである。時代別という、伝統的な古典文学研究の枠組みを超えていこうという意欲も非常に強いものである。しかし、これを具体的な営為として形にするのは、これからの各研究者自身の課題となり、それは非常に困難なものであることは、おのずと予想される。

これは、単に古典文学研究だけでなく、現在の人文系の研究全般にも通じる問題である。昨今、社会全体から人文系の研究への評価が非常に厳しいものとなっている。そのような中で、表現学やその関連分野の研究も、その存在意義や研究の価値を積極的に打ち出す必要がある。そして、これこそが、表現学に関わる、各研究者に課された、大きな課題ということになろう。

(甲南女子大学)

【表現学関連分野の研究動向】

日本文学研究 (近代)

原 卓史

『表現研究』誌上の前回の研究動向は、2012年に執筆された。本稿では、2013年から2015年にかけての研究動向を紹介することとする。

さて、同時代言説を参照し、研究対象とする作品のアクチュアリティを問うといういわゆる共時態研究の流行は、今日もなお継続中であるといっている。査読付き学会誌を頂点とする学会ヒエラルキーを相対化しない限り、こうした動向は延々とつづいていくことになるだろう。それを相対化するためにも、そろそろ通時態研究や、表現研究も含めた他の研究手法への転換が見られてもいい頃なのではあるまいか。

実際、こうした試みによる研究が皆無というわけではない。たとえば、文学の表現機構の研究を精力的に行っている安藤宏を挙げることができるだろう。前回の研究動向を担当した永井善久によって紹介された『近代小説の表現機構』(岩波書店 2012年3月)以降、安藤は立て続けに単著・編著を刊行している。高田祐彦、渡部泰明と共編になる『日本文学の表現機構』(岩波書店 2014年3月)は、古典、近代を超えて日本文学の表現自体の面白さに目を凝らしていく試みであった。『日本近代小説史』(中央公論新社〔中公選書020〕 2015年1月)は、明治以降の近代小説の歴史を、〈表現〉を補助線にして概説した書物である。そして『「私」をつくる 近代小説の試み』(岩波書店〔岩波新書1572〕 2015年11月)は、小

説の「私」に着目することによって、日本の近代以降の小説表現の歴史を概観することを試みた書物である。以上見てきたように、小説表現を通時態で捉え返すことこそ、安藤の試みであったに違いない。

その他、ブルナ・ルカーシュ「日本近代文学にみる「トスカ」—文学概念、そして、文学表現の軌跡を辿って」(『日本文学』2015年6月)は、憂愁、哀愁などと訳されるロシア語の「トスカ」を考察。自然主義以降、文学概念として用いられてきた「トスカ」は文学表現にも採用され、多層的な意味を産出していったことを明らかにした。梅山聡「泉鏡花『龍潭譚』の表現について—〈幼児の意識〉をめぐって—」(『東京大学国文学論集』2014年3月)は、文語文の性質を逆手にとって、「〈幼児の意識〉の形象化を行おうとした」とした上で、「回想形式を無効化する小説」と指摘した。

渡部麻美「堀辰雄『風立ちぬ、いざ生きめやも』—『風立ちぬ』から『万葉集』へ、『万葉集』から『風立ちぬ』へ」(『国文目白』2013年2月)は、「めやも」という表現に注目し、ヴァレリーの詩の訳のみならず、「『万葉集』的な死生観に下支えされた〈魂を鎮める言葉〉」として誕生したものだと指摘した。陳童君「『広場の孤独』の表現方法—堀田善衛における朝鮮戦争と「国民文学」」(『日本近代文学』2015年5月)は、作中の表現方法を未発表資料などと絡めて考察し、堀田の国民文学への志向を考察している。

以上、遺漏が多々あることを承知しつつ、稿を終えたい。

(尾道市立大学)

国語科教育

堀江 祐爾

平成27年度における国語科教育研究における表現学関連分野の研究動向についてまとめる。研究動向を最も反映したものとして、全国大学国語教育学会の研究紀要『国語科教育』を取り上げる。そこに掲載された論文の中から、表現学に関連した3編の論文を取り上げ、概要を示すことにする。対象は第77集(平成27年3月31日発行)と第78集(平成27年9月30日発行)である。学会ホームページより論文本文が入手可能である。

<http://www.gakkai.ac/JTSJ/kokugoka/>

【第77集掲載の論文より】

■勘米良祐太(筑波大学大学院)「中学校教授要目改正(明治44年)による文法教科書の変化—作文教育への『附帯』的指導に着目して—」…明治44年中学校教授要目改正により文法教育がどのように変化したのかを、「附帯」的指導という観点から論じ、次のことを明らかにした。文法を作文に対し「附帯」的に指導するときの内容のうち、(1)活用連語については、その扱いが抑制されつつある一方、(2)文の成分については、他の内容より優先して扱われるようになる傾向が見えた。この変化が生まれた原因としては、(1)活用連語内の語の「順序」が、必要な学習内容と見なされなくなったこと、(2)文の成分については、要目改正により大幅な構成の変更が可能となったこと、そしてそれが品詞を「帰納的」に定義する際にも有効だと考えられたこと。

■柴田昌平(東山中学高等学校)「生徒が

動く和歌学習—段階的に認識を広げる学習の実際—」…高等学校1年生を対象とし、単元「3ステップ和歌学習—『古今和歌集』春上を読む—」をまとめた実践論文である。糸井通浩が指摘する、日本語の基本的認識語彙である「かた」と「かたち」、「もの」と「こと」の関係論を応用した和歌学習を試みた。3ステップは次のようなものである。第一段階「かた」の学習—「リズムのかた」「表現のかた」—第二段階「かたち」としての和歌の学習・「こと」としての和歌の学習 第三段階「もの」としての和歌の学習—自分に引きつけて考える—。

【第78集掲載の論文より】

■鈴木貴史(帝京科学大学)「明治初期における書字教育の技能教育化」…欧米の教育課程をモデルとした学制期(1872(明治5)年の「学制」発布以降)の書字教育は、「作文」と「習字」の教育に分離されていたものの、上級の毛筆書字教育では、当時実用的であった書簡文作成を通じて、文章作成と字形運筆の習得、さらに知識の獲得が一体となった教育が展開された。この時期の書字教育について、多くの資料をもとに丹念に考察を展開している。やがて、1900(明治33)年の「小学校令施行規則」において、「習字」は、独立した教科から国語科の一領域である「書_マキ方」とされた。一方の「作文」は、同様に「綴_マり方」として同じ国語科に組み込まれた。この字形運筆を主とする書写と、文章作成を通して書かれた内容を重視する作文の二領域に書字教育を分割する方法が現在まで継承されている。

(兵庫教育大学)

日本語教育

大島 中正

2013年1月から2015年12月までの3年間において特筆すべきテーマは「やさしい日本語」であろう。研究と実践の両面において充実してきている。

ウェブ上で「やさしい日本語」によるニュース、NEWS Web Easyが本格的に提供されるようになった。「普通のニュース」とその「やさしい日本語」版とが提供されているため、利用者は両者を比較して、表現上の種々の差異をすることができる。

この3年間に公刊された書籍、雑誌としては、下記の①～③が主要なものである。

- ①庵 功雄、イ・ヨンスク、森 篤嗣 (2013.10)『「やさしい日本語」は何を目指すか多文化共生社会を実現するために』ココ出版
- ②日本語教育学会 (2014.8)『日本語教育 特集「やさしい日本語」の諸相』158号
- ③公益財団法人日本のローマ字社 (2015.10)『ことばと文字 特集「やさしい日本語」の研究動向と日本語教育の新展開』4号

ここでは、湯浅千映子氏の研究をとりあげる。湯浅 (2014.10)『「やさしい日本語」に見る言い換え操作—語句交替の形式に着目して—』神奈川大学経営学部『国際経営論集』48号は、愛知県地域振興部国際課多文化共生推進室の『やさしい日本語の手引き』等を資料として、「やさしい日本語」が、「一般向け」に書かれた文

章と比較すると、和語に重みのかかった表現であること(例：不通→使えない、動いていない。倒壊する、破損する→壊れる)を明らかにしている。「やさしい日本語」ばかりでなく、小学生新聞などを言語資料として、受容者の差異に応じた表現の類型についての研究を、長年すすめてこられた湯浅氏の研究成果がまとまった形で公刊されることが期待される。林四郎氏は、かつて、井上ひさし氏との対談(「ことばの表現力」『國文學—解釈と教材の研究—』29巻6号)の中で、日本人が「どの方面へも発展するような本源的なことばを使ってじっと考えようと思う時には、和語でないと頼れない」と感じると発言されている。和語は「やさしい」とは、日本語母語話者の錯覚にすぎないのかもしれない。湯浅 (2014: 154)も指摘するように、「やさしい日本語」の「やさしい」とは、あくまでも製作者である日本人が考えるやさしさであって、在住外国人が「やさしい」と感じるか否かは、定かではないと、まずは考えるべきであろう。

「やさしい日本語」は、「日本語人」(田中克彦2011『漢字が日本語をほろぼす』角川SSC新書126を参照)全員の問題である。日本語非母語話者のみならず、日本語母語話者にとっても、平明にして達意の文体であるべく、みがかれていくことが望ましかろう。表現学の立場からは、言文一致の文体の問題としてとらえることができるだろう。あるいは「やさしい日本語」に対する日本語人の態度や評価のありようは、表現論説史上の問題として考究することが可能であろう。(同志社女子大学)

英語学関係

吉村 耕治

国際社会で通用する人材の育成を目指して、日本の英語教育史上で最大の挑戦が推進されている。そのため、英語学関係では英語教育に関する論考が、特に増加している。この現象には、海外だけではなく日本国内でも異文化コミュニケーションや多文化共生が、重要な課題になりつつある現状が反映されている。

日本の文系の大学は産業界から「社会で即戦力になる人材を育てていない」という批判を受けていたことから、国際共通語としての英語を用いて思考し表現する能力を育成するための教育環境づくりが進められている。文部科学省は「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」を2013年12月に発表した。2014年2月から9月にかけて、英語教育の在り方に関する有識者会議を9回開催し、英語教育改革の5つの提言もまとめられている。アジアの中でトップクラスの英語力を目指すべきと提言されている。

ヨーロッパでは、個人が複数の言語を習得することを目指す複言語主義を推進しており、科目力や語学力に加えて、多面的思考力や協働力を育てる包括的教育法としてCLIL (Content and Language Integrated Learning: 内容言語統合型学習) が普及しつつある。さらに、親元や教員から離れて見聞を広げることを目指すギャップ・イヤーも、イギリスで始まり、世界的に注目されつつある。

World Englishes (世界諸英語) の台頭によって、英米の発音の威信が低落する

可能性も否定できない状況があり、「二ホン英語は大学英語教育の目標になりうるか」を考える論考(著者の答えは条件付きでYes)や、アメリカ合衆国の心理学者Kaganなどが主張する互惠的協力関係や、グループの目標と個人の責任の明確性、対面での活発な相互交流(参加の平等性)、活動の同時性(小集団活動の奨励)、活動の振り返り(改善手続き)という5つの基本理念から成る「協同学習理念を取り入れた英語リーディング授業」に関する論考がある。協同学習を成功させる仕掛けとして、課題への集中(Keep on Task)や、皆と一緒に実施(Include Everyone)、静かな声(Six-inch Voices)、仲間と座る(Stay with Your Group)、皆を励ます(Encourage Everyone)、多くの考えを共有する(Share Ideas)という技能のKISSESが紹介されている。

母語を使わないでBasic Englishを前提とした英語の授業法の「GDM (Graded Direct Method) から何を学ぶか—生徒が学ぶ英語授業のために」を考える論考もある。GDM授業では学習者は常に自分にとっての表現が要求されている。

他にも、「日英語の形容詞の語順の比較—old colorful potsが『色鮮やかな古いつぼ』になるのはなぜか」や学際的研究もある。言語の理解や視覚認知、聴覚認知は、それぞれに特化した脳領域が動員されており、朗読されると、腹式呼吸や軽い有酸素運動にもなる。ストレスの軽減に役立つ表現研究も可能である。表現研究においても、人と人とが理解し合うための人間教育が基盤で、社会に役立つ表現研究の推進や研究の多様性が求められる。(関西外国語大学)

言語学

藤岡 克則

言語学の2013年度から2015年度までの研究動向について書くようにとのことであったが、あまりに広範なため、ここでは表現研究に関連深いと思われる、日本における意味論研究の最新情報を中心に、筆者の関心をひいた研究を取り上げたい。

最新の意味論研究の集大成として、2010年に澤田治美氏の編集によって、『ひつじ意味論講座』第1巻が、ひつじ書房より刊行され、その後、2011年に第5巻が、2012年に第2巻・第4巻・第6巻がそれぞれ刊行された。続く2014年には第3巻、そして2015年に第7巻が刊行されたことにより、本講座全集が完成したことになる。本講座は、ひつじ書房創立20周年を記念して企画されたものであり、82名の執筆者による研究論文が収められ、日本における現代意味論研究の全貌に接することができる貴重な全集となっている。

全7巻のタイトルは以下の通りである。
第1巻『語・文と文法カテゴリーの意味』
第2巻『構文と意味』
第3巻『モダリティⅠ：理論と方法』
第4巻『モダリティⅡ：事例研究』
第5巻『主観性と主体性』
第6巻『意味とコンテクスト』
第7巻『意味の社会性』

本全集の意味論に対する基本的な研究方法は、「意味の同心円的なレベル」を設定し、「命題の意味」を核とし、その周りに「モダリティの意味」、「発話場面的

意味」が核を囲み、最も外側の円として「社会・文化的意味」が存在するというアプローチである。

今回は、2014年に出版された第3巻『モダリティⅠ：理論と方法』、及び、2015年出版の第7巻『意味の社会性』に焦点を絞って言及したい。（この2冊が、今回の参照期間に刊行された。）

近年、言語事象としてのモダリティ研究が活発に行われてはいるものの、モダリティそのものの定義は、研究者によって異なっているのが現状である。また、ギリシャ哲学にまで遡ることができる西洋言語学におけるモダリティの捉え方と、時枝誠記の「詞」と「辞」の区別や、さらには江戸時代の国学にも由来する「事柄に対する話し手の主観的な判断や心的態度」を担うモダリティ概念という日本語学における相違も含め、『モダリティⅠ：理論と方法』において、今日までに提示されたモダリティという概念や定義をめぐり、分かりやすく解説されている。また、モダリティに関わる事象自体の広がりからも、モダリティ研究が今後さらに発展していくであろうという期待を抱くことができる一冊である。

本全集の最後を飾る第7巻は、『意味の社会性』と題され、呼称・ジェンダー・コミュニケーションといった従来からの意味論研究に留まらず、医療・司法・災害・スポーツ・翻訳・国語などの広い視野から意味の社会性に光を当てた斬新な研究アプローチであり、日本の意味論研究の新たな方向性を示唆する興味深い研究が扱われており、今後の研究発展が大いに期待される分野である。

（大阪産業大学）

認知言語学

長谷部 陽一郎

近年の認知言語学ではコーパスからのデータや高度な統計的手法を活用した量的研究の占める割合が向上している。L. Jandaによる2013年の報告によると、専門学術誌*Cognitive Linguistics*において1990年から2007年までは、量的データは2割から4割以下の論文で扱われるに過ぎなかったのに対し、2008年以降は常に半数以上の論文が何らかの定量的分析を含むようになってきている。要因の1つは、認知言語学における基礎的な理論研究がある種の安定状態に達し、新たな貢献を行うために、より高い実証性が求められるようになったことであろう。しかし量的データ重視の傾向が高まる一方で見逃せないのは、「表現」としての言語への姿勢を重視した研究の潮流も今まで以上に存在感を高めている事実である。これは従来取り上げられてこなかった種類のテキストにも認知言語学的なアプローチを適用するという方向性であり、最近出版された以下の英語文献2点に象徴的に示されている。

最初に紹介するのはB. DancygierとE. Sweetserによる*Figurative Language* (2014, Cambridge UP) である。本書は1980年代からの認知言語学における比喩表現研究の系譜につながる解説書であるが、これまでの類書とは異なる特徴を持つ。概念メタファー理論、メンタル・スペース理論、ブレンディング理論といった基本的枠組に関する章に加えて、構文パターンに観察される比喩性、フ

レーム概念の多言語間での相違、文学作品や科学的文章といったジャンル別テキストにおける比喩的意味の発現といった内容に個別の章が割かれており、認知言語学における比喩研究の最先端に触れ、今後の課題領域を概観することができる。

次に紹介するのはC. Harrison, et al.による論文集*Cognitive Grammar in Literature* (2014, John Benjamins) である。本書には文学研究の様々な側面に対しR. W. Langackerが提唱する認知文法理論の道具立てを用いてアプローチした14編の論文が収録されている。しばしば誤解される事実であるが、必ずしも「認知文法＝認知言語学」ではない。認知文法はLangackerによる体系的な文法理論の名称であり、他の理論と多くの部分で共通しつつも、内部で首尾一貫した体系を持つことを目指した独自の理論である。编者らによると、言語理論の文学研究への応用は古くから目指されてきたが、実質的な成果を生み出してこなかった。その背景には同じ用語群を用いて定義される理論的基盤が研究者間で共有されていなかったことがある。この意味において、Langackerによる道具立てを用いた文学研究の可能性を探るといふ本書の目的は明確である。Langacker自身による本書の前文でも述べられている通り、あらゆる言語表現は単位や規模の大小に関わらず「形式と意味との記号関係」の元に成立する。このことを踏まえ、本書の試みは最もマクロなレベルにおける言語表現の理解に対し貴重な貢献を為し得るものと評価できるだろう。

(同志社大学)

修辞学

森 雄一

本稿は、前回展望の対象期間以降、2013～2015年を扱う。この期間には、多門靖容『比喩論』(2014、風間書房)と、はんざわかんいち『表現の喩楽』(2015、明治書院)という、長年に渡って比喩研究を牽引してきた二人の研究者の著書が刊行された。前者は、現代語を中心に隠喩の本質や機能を扱った1～3章と古典文学作品を題材に実証的な論考をまとめた4～9章から構成されている。後者は、村上春樹・小林秀雄・富士谷御杖・政治言説・言語発達など多様な題材を、比喩を切り口にして論じたものである。両書の肌合いはかなり異なるが、理論的な枠組みを前提とせず、対象となる言語現象や作品・文学者それぞれに固有の問題を発見し、それにふさわしい道具立てをその都度用意し論じていくという、独創性の高いスタイルであるところは共通しているといつてよい。理論的な枠組みからのレトリックの分析としては、山梨正明『修辞的表現論 認知と言葉の技巧』(2015、開拓社)が刊行された。認知能力・認知プロセスの観点から、様々な言語技巧を扱っており、多くの新見に富んでいる。認知言語学的アプローチでは、概念メタファーの研究も収穫期にあり、荒川洋平『デジタル・メタファー』(2013、東京外国語大学出版会)は、コンピューターに関する多種多様なメタファーを45の「デジタル・メタファー」として定式化し、その背後にある思考に迫っている。本誌99号にも、松浦光「概念メタファーから

みた空模様」が掲載され、このアプローチにもまだ掘り尽くされていない鉱脈があると考えられる。また、本誌102号掲載の、稲益佐知子「「恐怖」を修飾する表現について」は、直喩を中心に扱っているとはいえ、「恐怖」という抽象的なものをどのように捉えるか、という概念メタファー論とも共通する問題意識を持つものであり、認知的なアプローチとも親和性が高い。語用論的なアプローチでは、論証的ポリフォニー理論と意味ブロック理論を用いた大久保朝憲「アイロニー・からかい・緩叙法・婉曲表現についての試論」(『関西大学文学論集』64-4、2015)が、新しい観点から興味深い分析を行っている。個別の作家・作品の修辞的側面を扱った文体論的研究として、芳川泰久・西脇雅彦『村上春樹 読める比喩事典』(2013、ミネルヴァ書房)は、村上春樹の比喩をテーマ別に集めるとともに、「コラム」や「レクチャー」の形で独自の考察を行っている。水藤新子「三島由紀夫「橋づくし」の表現」(『中央学院大学人間・自然論叢』39、2015)は、「凝った修辞が多々出現する作品ではない」としつつも、この作品を魅力的なものたらしめている表現技巧を修辞面も含め丁寧に解説している。本誌101号に掲載された畑中基紀「『坊っちゃん』における悪態の機能」と、李種恩・柳澤浩哉「『それから』の表現に現れた代助の思考の特徴」は、漱石作品の言語表現の分析であるが、修辞学的な観点から読んででも得るところが多いものである。以上に見たように、修辞学研究において実りの多い3年間であった。今期の成果をうけた研究の進展を期待したい。(成蹊大学)

【表現学関連分野の研究動向】

文章・談話研究(1)—4つの視点から—

野村 眞木夫

2013年から2015年にかけての文章・談話研究で、表現研究の観点から重要だと判断される動向として4点を取り上げる。

①接続詞を中核とした文章研究があり、文法論との境界において文脈を重視する観点から展開されている。長谷部亜子2014「接続詞コノウエ/ソノウエの選択要因とその優先順」『日本語文法』14(1)はBCCWJを用いて両語を調査し、コ/ソの部分が承ける前文脈およびコノウエ/ソノウエ以後の後文脈の事態がそれぞれ既然か未然かがそれらを使い分ける際に優先され、自由間接話法にかかる話者の視点の介入が第二の要因であることを論証する。鯨井綾希2015「同一名詞のくり返しが生じる文章展開—接続表現を指標とした分析—」『文化』78(3・4)もBCCWJを用い、接続表現により形成された文脈で、同一名詞のくり返しの量がそれ以前に比べて変化する様相を明らかにし、文章展開における同一名詞のくり返しかたとそこに用いられる接続表現の類型との対応関係を整理する。

②大学講義の理解に関する研究では、談話構成、特に話段の構造を前提とした研究が目についた。研究代表者佐久間まゆみ2015『大学学部留学生による講義理解の表現類型に関する研究』掲載の宮田公治「3種の講義A,G,Hにおける「話段の切れ目」「重要情報を含む文」の頻用文型」、伊能裕晃「講義の「話段」の構造とフィラーの出現傾向」はそれぞれ話段との関連で分析し、また石黒圭2015「大学

講義の文末表現の機能—引用助詞「と」で終わる文を例に—」『一橋大学国際教育センター紀要』6は、標記の類型について引用表示・構造表示・文脈補填・談話境界の4つの機能をあげる。

③談話における発話と身振りや視線との関連に着目したマルチモダリティの研究が行われている。城綾夫・平本毅2015「認識可能な身振りの準備と身振りの同期」『社会言語科学』17(2)は、参加者の認識可能な身振りの準備段階を仮定し、その構えが他の参加者に利用され、発話の展開との関連などを資源として、両者の間に身振りの同期が起こると想定する。

④医療・福祉関係者と患者・利用者間の談話を中核とした研究が一つの流れを作っている。方言学との境界に位置する仕事だが、友定賢治2014「「臨床方言学」の確立に向けて」『人間と科学』14(1)は、この動向を概観している。震災のつらさ寂しさを語るという局面は表現の一般的な領域に帰属する。さらに、今村かほる2015「医療・福祉と方言—応用方言学として—」『方言の研究』1は、表現方法とコミュニケーションに触れ、何を話すのか、患者は質問できるか、応答に肯定形・否定形のどちらを用いるかを問い、オノマトペの表現にも言及する。

以上のように、文章・談話の領域では、文法論に立脚した精緻な記述研究が着実に展開される一方で、避けがたい現実を表現の側面からどのように理解し対応することができるのかが問われている。表現は複数の要因が統合された具体相であり、その多重性や複合性の様相を理解することが求められ、また推し進められているのである。(上越教育大学)

【表現学関連分野の研究動向】

文章・談話研究 (2)

—関連領域を含む視点から—

立川 和美

文章・談話研究は、大きな言語単位を対象とする点で非常に多様であり、2013年6月発行の表現学会編『言語表現学の諸相 第2巻』清文堂出版に見られる一連の研究でもそうした特性がよく表されている。近年は、文章と談話の連続性や関係性を踏まえた研究や、社会事象と深くかかわる文章・談話を扱う研究も多く見られる。ここでは、前回の研究動向以後2015年までの研究動向を概観したい。

まず、文章と談話の両方を射程に入れた研究としては、石黒圭・橋本行洋(2014)『話し言葉と書き言葉の接点』ひつじ書房、阿部二郎・庵功雄・佐藤琢三編(2015)『文法・談話研究と日本語教育の接点』くろしお出版がある。前者は日本語学会2013年度春季大会のシンポジウムをもとにした論文集であり、後者は、文法、談話、日本語教育の諸分野に関わる近年の諸研究が収められている。

個別研究についても様々なアプローチが見られるが、たとえば文章では、石井久美子(2014)「大正期雑誌の書き手・読み手の位相差と外来語の使用実態」『表現研究』99、石出靖雄(2014)「視点の違いが文構造に与える影響—文末表現を中心に—」『表現研究』100など、テキスト内の表現について書き手などの外的要素から考える研究が見られた。談話では、三牧陽子(2013)『ポライトネスの談話分析—初対面コミュニケーションの姿としくみ—』くろしお出版といった従来からのコミュニ

ケーション研究に加え、東日本大震災時の公共メディアの言語を批判的談話分析によって考察した名嶋義直・神田靖子編(2015)『3.11 原発事故後の公共メディアの言説を考える』ひつじ書房や、EPAによる外国人介護福祉士の受け入れをとりあげた上野美香(2013)「介護施設におけるインドネシア人候補者の日本語をめぐる諸問題—日本人介護職員の視点からの分析と課題提起—」『日本語教育』156など、現代の日本社会と深くかかわる研究が進められた。さらに、植田栄子(2014)『診療場面における患者と医師のコミュニケーション分析』ひつじ書房といった、医療コミュニケーションのような新たなトピックに関する研究も注目される。

最後に、ここ数年の進展が著しい大規模コーパスについて触れておく。前川喜久雄監修、山崎誠編(2014)『講座日本語コーパス2 書き言葉コーパス—設計と構築』、同(2015)『講座日本語コーパス3

話し言葉コーパス—設計と構築』、前川喜久雄監修、田野村忠温編(2014)『講座日本語コーパス6 コーパスと日本語学』では、日本語コーパスを活用した研究について様々な角度から詳述されている。ユニークなものとしては、石井正彦・孫栄爽(2013)『マルチメディア・コーパス言語学—テレビ放送の計量的表現行動研究』大阪大学出版会があり、3種類のテレビ放送のコーパスに基づき、視線や身ぶり等と音声言語との関係について研究が行われている。

このように文章・談話研究は、社会や生活と深く関わりながら、分析対象のジャンル、研究手法ともに今後も広がっていくと考えられる。(流通経済大学)